対人魅力における Investment モデルの検討

井　上　　徹

従来から、対人魅力の研究は、魅力（他者に対する好意的態度）とその決定因を明らかにしようとしてきた。認知的バランスから態度の類似性を強調する Newcomb (1968)、強化因としての類似性を強調する Clore & Byrne (1974)、属性の感情的価値を強調する Ajzen (1974) などがその代表的研究といえる。この他にも、他者からのポジティブな評価 (Aronson & Linder, 1965)、他者の身体的魅力 (Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman, 1966 ; Berscheid & Walster, 1974)、好意の返報性 (Berscheid et al., 1969)、単なる接触 (mere exposure) (Zajonc, 1968) などが魅力の重要な要因とされている。

しかし、最近こうした対人魅力の研究に対して、もの足りなさを指摘する研究者も多い (Berscheid, 1985)。一つには、方法論に対する不満である。魅力とその規定因を因果的に説明するために、研究者が場面をコントロールできる実験状況が研究によく使用され、実際の交際、交友関係についての研究が少ないといわれている。つまり、初期印象や初対面場面に研究が偏り過ぎるのである。Huston & Levinger (1978) によると、1972年から1976年までの対人魅力研究のうち、3分の2が、他者についての情報を与えた直後、もしくは短かい出会いの直後の印象に基づく研究であった。第二に、強化理論の過度の一般化に対する批判である。Levinger (1974) は、「強化理論の強さは、同時に弱点でもある。<中略>すべてのことを説明できるのは、また何も説明しないのと同じである。」と述べている。動物の学習に適用された強化モデル（S⟶O⟶R）を、単純に複雑な人の行動に適用すると、社会的行動の相互作用的

な本質を見失なうことになるという懸念がそこにあるといえる。魅力の決定因にのみとらわれると、対人関係を一時点における、固定したものとして見てしまうことになりがちである。関係は、時間と共に発展（消滅）する、二者の相互影響的なものとして取らえられなければならない。

こうした批判を受けて、対人魅力の研究者たちも、研究の方向を徐々に変化させてきている。Berscheid (1985) は、対人魅力の研究の最近の傾向として、①理論化が相互作用的なアプローチをとる傾向にある。②個人にとっての刺激の意味や価値が、慎重に考えられるようになってきた。の二点をあげている。すなわち、単に魅力それ自体を考えるのではなく、対人関係の発達における魅力の役割へと研究の焦点が移り、人と人との魅力のプロセスは、相互作用的なものであるとの再認識がなされているといえる。

このような対人魅力の研究的背景のなかで、Rusbult (1980, a ; b) は，従来の対人魅力の研究が、暗黙の前提としていた点を取り上げて問題にしている。すなわち、この前提とは次の二点である。①二人が互いに好き合っているならば、お互いにその関係を維持しようとするであろう。②好き合っていないならば、関係は終わりになろだろう。特に彼は、②に対して、例外的な関係が存在することを指摘している。体験的にみても、人と人との関係は、非好意的関係であっても継続されることがしばしばある。いわゆる倦怠期を迎えた夫婦関係や、よくケンカをするが居なければもの足りないライバル関係、商取引きなどでやむを得ず続く関係などがそれにあてはまる。このような、好意的な感情関係でなくとも、二者の関係が維持されることを説明するため、Rusbult (1980, a) は、コミットメント (commitment) の概念を提案している。コミットメントは、関係を去る可能性と心理的な愛着の感情として定義され、実際には、関係の持続の予想、関わりの強さ、愛着の強さなどから測定されている。そして彼は、関係に対する満足度とコミットメントは、必らずしも同一のものではないと考え、Thibaut & Kelley (1959) の相互依存理論の考え方を借りて、investment (投資) モデルを提唱している (以下、投資モデルと記す)。

Rusbult (1980, a ; b) の投資モデルは、次の２つの式によって表わされる。

$SAT_X = (R_X - C_X) - CL$

$COM_X = SAT_X + I_X - A_Y$

SAT_X：満足度　R_X：報酬　C_X：コスト　CL：比較水準

COM_X：コミットメント　I_X：投資　A_Y：選択的価値

まず第一式の満足度については、関係から受ける報酬とコストに影響を受けると考えられる。すなわち、関係から高い報酬を受けることができ、コストが低く、比較水準がより低い時、人はその関係により高い満足を覚えるといえる。なおここでの比較水準は、関係に対して一般的に期待するものであり、例えば、異性の相手との関係はこうありたい、といったものである。大きな期待を抱かずにいて、予想外によいことが得られると、満足度はより高くなると考えられる。但し、Rusbult (1980, a ; b) は、当該の関係から受ける報酬とコストを、一般的に期待する報酬とコストから切り離して考えることは、非常に困難であるとして、実際には CL の測定を行なっていない。事実上は、満足度は、報酬とコストによって規定されると考えるのである。この第一式は、従来の対人魅力の諸理論と結びつくものである。すなわち、報酬及びコストを、類似する態度の比率とみれば、Byrne (1972 他) の強化モデルとなり、属性の持つプラスの感情的価値の保有可能性とみれば、Ajzen (1974) の感情的価値モデルとなる。

投資モデルの独自性は、第二式にあるといえる。コミットメントは、満足度と共に、投資、選択的価値とも関わっていると考えるのである。コミットメントが、満足度と関わっていると考えるのは、従来の対人魅力の研究と同様であるが、それと同時に、関係に対してどれだけ物質的、精神的につぎ込んだか、どれだけ２人に共通なあるいは特有なものを作り上げたか、といった投資も関係している。さらに、当該の関係の他に、それに代わる関係（別の人と付き合う、あるいは付き合うのをやめて一人になる）にどれだけ魅かれているかも、選択的価値として関わってくるというのである。すなわち、関係へのコミット

メントは、満足度が高いほど、投資の量が多いほど、また選択的な価値が小さいほど大きいといえる。

本研究は、この投資モデルについて、満足度及びコミットメントにそれぞれの要因がどのように関わっているのかを、これを構成する項目とともに再検討しようとするものである。

方　法

被験者　被験者は、大学生男子47名、女子61名、計108名。1回生20名、2回生20名、3回生42名、4回生26名。対象を、現在交際中の異性の相手がいる人に限定したため、友人の紹介などによって、調査票を配布、回収した。

調査票の構成　Rusbult (1980) に基づいて、計48項目を用意した。彼は、それぞれの項目について、概略だけを示しているので、意味の分かりやすい文章に再構成した（表1参照）。

①R_X　（報酬）　10項目　好ましい特質を持った関係であり、相手の人物が魅力的な属性・特性を持っていることを示す。例、「彼または彼女とは、ものの考え方や意見がよく似ている。」、「全体として、彼または彼女との関係から、あなたは、どれほど得る所がありますか。」など。

②C_X　（コスト）　10項目　好ましくない特性を持った関係であり、相手が魅力的でない属性・特性をもっていることを示す。例、「彼または彼女には、がまんできない所（性格、行動上）がある。」、「全体として、彼または彼女との関係からは、得るものより失なうものの方が多い。」など。

③A_Y　（選択的価値）　7項目　現在の関係の他に可能な関係に対する評価。「いま付き合っている彼または彼女以外の、もう一人別の親しくしている異性の友人」に対して評価させた。例、「その人は、彼または彼女よりも、大変魅力的である。」、「彼または彼女との関係より、その人との関係の方が好ましい。」など。

④I_X　（投資）　13項目　投資には2つの内容が含まれ、一つはその関係に「つぎ込んだ」程度であり、今一つは、その関係だけに特有の事柄、人物、活

動などがどの程度あるかである。例えば、「いつも相手のことを考えたり思ったりしている。」、「二人の間に共通の思い出がたくさんある。」

⑤SAT_X　(満足度)　4項目　相手に対する満足度の程度を示す。例えば、「どの程度彼または彼女に好感をもっていますか。」、「いまの彼または彼女に満足している。」

⑥COM_X　(コミットメント)　4項目　結びつき及び関わりの強さを示す。「近い将来、二人の関係は終ると思う。」、「どの程度いまの彼または彼女との関係に関わっていますか。」など。

いずれも、9ポイントの線分尺度がついており、両極には、「非常にそう思う」「全くそう思わない」などの言葉がそえてある。

結　果

データの集計と分析は、関西学院大学 VŌS-3、及び大阪大学 ACŌS-6の、SPSS 統計パッケージによって行った。

1.　各項目の信頼性

各項目のセットごとに、信頼性係数 (α_A) を求めた。さらに当該の項目を除いた後の信頼性係数 (α_B) に注目し、$\alpha_A < \alpha_B$ となる項目を除去した。表1のように、R_X 1項目、C_X 2項目、A_Y 2項目、I_X 2項目、COM_X 1項目が除かれ、最終的に計40項目を以下の分析に使用した。

なお最終的な各項目セットの信頼性 (α_C) は次の通りである。R_X .8189、C_X .7451、A_Y .8405、I_X .8350、SAT_X .8943、COM_X .7614。

表1.　各項目除去後の信頼性係数 (α_B)

R_X　(報酬)	$\alpha_A = 0.8115$	α_B
1.	あなたの欠けている所を補ってくれる。	.7887
⚠	ハンサムまたは美人である。	.8189
3.	ものの考え方や意見がよく似ている。	.8027
4.	人から好かれる性格の持ち主である。	.7934

5.	知的な人である。	.8025
6.	一緒にいると、とても楽しく感じる。	.7751
7.	あなたに合わせてよく行動してくれる。	.8091
8.	ユーモアのセンスがある。	.7907
9.	全体として、彼または彼女との関係から、どれほど得る所がありますか。	.7787
10.	理想と比べて、いまの関係はどうですか。	.7852

C_X （コスト）	$\alpha_A=0.7077$	α_B
1.	関係を続けるために、大変な苦労をした。	.6900
⚠	どのくらいお金を損しましたか。	.7215
3.	一緒にいる時に、居づらいと感じたことがよくある。	.6436
4.	がまんできない所（性格・行動上）がある。	.6398
5.	自分に言えない秘密があるようだ。	.7044
6.	よくけんかをする。	.7038
7.	あなたのいろいろな働きかけにこたえてくれない。	.6815
⚠	必要以上に頼ったり甘えたりする。	.7185
9.	全体として、彼または彼女との関係からは得るものより失なうものの方が多い。	.6753
10.	損失という点で考えると、いまの関係はどうですか。	.6623

A_Y （選択的価値）	$\alpha_A=.8073$	α_B
1.	彼または彼女よりも大変魅力的である。	.7638
2.	あなたにとり大変重要な人である。	.7739
3.	彼または彼女と別れて、その人と付き合ってもいいと思う。	.7645
4.	全体的にみて、その人に大変魅かれる。	.7542
⚠	彼または彼女との関係に比べて、その人との関係はどうですか。（理想的か）	.8200
6.	その人との関係の方が好ましい。	.7642
⚠	独りになったとしたら、みじめに感じたり、哀しくなると思う。	.8220

I_X （投資）	$\alpha_A=.8187$	α_B
1.	他の異性の友人よりも、彼または彼女との付き合いの方が多い。	.8092
2.	関係が終ったとしたら、ダメージやショックを受ける。	.7969
3.	付き合いはじめてから、両方にできた共通の友人は多い。	.8123
4.	二人の間に共通の思い出がたくさんある。	.8109
⚠	二人の間で、お金をかなり使った。	.8201

6.	二人に共通の持物がたくさんある。	.8011
7.	二人でいつも一緒に行動する。	.8069
8.	いつも相手のことを考えたり思ったりしている。	.8000
9.	いつも自分のことを打ち明ける。	.7841
10.	もし関係が終ったとしたら失う物が多い。	.8007
11.	全体として、二人の関係にいろいろ気を使った。	.8060
12.	付き合ってからの期間はどれくらいですか。	.7985
△	一週間のなかで、二人で過す実際の時間は。	.8323

SATx （満足度）	α_1＝.8943	α_B
1.	どの程度、彼または彼女に魅力を感じていますか。	.8529
2.	どの程度、彼または彼女に好感をもっていますか。	.8712
3.	いまの彼または彼女に満足している。	.8378
4.	彼または彼女と一緒に居るだけで満足である。	.8941

COMx（コミットメント）	α_1＝.6914	α_B
1.	近い将来、二人の関係は終ると思う。	.6160
△	いまの彼または彼女に代るとしたら、どんな人を求めますか。（よく似た人？）	.7614
3.	いまの関係に愛着をもっていますか。	.5385
4.	どの程度、関係に関わっていますか。	.5860

△は除去項目

2. 満足度

関係に対する満足度については、後に述べるコミットメントと同様、重回帰分析を用いて分析した。表2の各統計量については、三宅他（1977）に述べられている通り、次の様な意味を持っている。BETA は標準化偏回帰係数を表し、各変数の独立変数に対する相対的貢献度を示している。Rは重相関係数。変数を投入していき、投入した時点までの従属変数による推定値と独立変数の相関係数を示す。変数を投入するに従って、Rは大きくなる。寄与率は、その段階までの R_i^2（重相関係数の自乗）から、前の段階までの R_{i-1}^2 を引いたもので、投入された変数の説明比率を示している。

表2．満足度の重回帰分析

		BETA	R	寄与率
(全体)	R_X	.4783**	.7444	.5542
	A_Y	−.2860**	.8182	.1152
	C_X	−.1885**	.8265	.0137
	I_X	.1680**	.8383	.0196
(男子)	R_X	.5967**	.8136	.6620
	A_Y	−.2654**	.8706	.0960
	I_X	.1541*	.8772	.0115
	C_X	−.0830	.8796	.0042
(女子)	R_X	.3937**	.6928	.4800
	A_Y	−.3251**	.7858	.1375
	C_X	−.2595**	.8047	.0301
	I_X	.1512*	.8150	.0166

** $P<.01$, * $P<.05$

各下位項目は、セットごとに総和され、BETA の高い変数から順に重回帰式に投入された。

まず、男女合わせて全体のデータでみると、全項目について、標準化偏回帰係数（BETA）は有意であった。しかし、その相対的な寄与率は大きな差がみられた。最も寄与率が大きいのは、報酬（R_X）であり、.5542を示している。関係に対する満足度は、相手から得るものが多いか否かにかかっているといえる。次に、選択的価値（A_Y）の .1152があげられ、BETA にみられるように、満足度に対しては、負の影響があるといえる。もう一人別の相手との関係に価値を置く人は、現在の相手との関係に満足していないことがわかる。コスト（C_X）と投資（I_X）については、BETA は有意ではあるが、寄与率はいずれも小さい。

次に男女それぞれのデータをみていく。まず男子については、報酬が非常に大きい寄与率（.6620）を示していることが特徴である。BETAも有意である（$F_o(4,42)=34.190, P<.01$）。すなわち男子は、現在の関係に対する満足度

を、相手から得るものがあるかどうかを中心に判断しているといえる。報酬は、相補性、類似性、属性の感情的価値など様々な形でもたらされるが、こうした相手からの見返りがなければ、満足度は低くなるといえる。逆に、コストの BETA は有意ではなかった ($F_o(4,42)=2.224$, ns)。いくら相手との関係で苦労し、損失を受けたとしても、満足度が有意に下がるとはいえないことを示している。女子も、男子と同じく報酬が最も大きな寄与率（.4800）を示している。しかし男子ほど値は大きくなく、相手から得られるものだけでは、十分に満足度が予測できないといえる。男女とも、第二位にあげられているのは、選択的価値である（寄与率、男子.0960；女子.1375)。他に付き合っている相手に魅かれるほど、当該の相手に対する満足度は下がるといえる。また同様に男女とも、投資について、寄与率は低い（男子.0115；女子.0166）が、BETA は有意であった（男子$F_o(4,42)=2.648$, $P<.05$；女子（$F_o(4,56)=2.766$, $P<.05$)。投資モデルによると、この選択的価値と投資の 2 要因は、満足度に関する第一式からは除かれているが、これは規定因として働かないのではなく、影響力が小さいためと考えなければならない。

満足度に関して、女子の特徴は、コストの BETA が有意（$F_o(4,56)=7.104$, $<.01$）となり、寄与率も.0301と小さいながらみられることである。男子の場合、コストが満足度の予測にほとんど寄与していないのに対して、女子の場合には、関係に伴なうコストの影響も無視できず、失なうものが多いと、満足度も低くなるといえる。

3. コミットメント

全体的にみると、いずれの項目の BETA も有意となり、コミットメントの予測への有効性を示している。まず満足度の場合と異なり、投資に最も寄与率が高くなった（.4287)。関係に対してつぎ込んだ程度、あるいはつぎ込むことによって作り上げた二人に特有の事物などが、コミットメントに最も強く関わっていることがわかる。投資すればするほど、関係に対して愛着がわき、離れにくくなるといえる。次に、コストの寄与率が高く（.1947)、損をするような

関係に対しては、関わり方も薄くなることを示している。さらに、報酬（寄与率.0236）や選択的価値（寄与率.0236）も、寄与率は小さいが、BETA は有意であり（報酬 $F_o(4,103)=8.708$, $P<.01$; 選択的価値 $F_o(4,103)=7.495$, $P<.01$)、コミットメントの予測に関連しているといえる。

表3. コミットメントの重回帰分析

		BETA	R	寄与率
(全体)	I_X	.4761**	.6547	.4287
	C_X	−.2789**	.7895	.1947
	R_X	.2216**	.8075	.0287
	A_Y	−.1737**	.8220	.0236
(男子)	I_X	.5518**	.7871	.6195
	R_X	.2683**	.8471	.0981
	C_X	−.1538	.8663	.0330
	A_Y	−.1348	.8736	.0126
(女子)	I_X	.4299**	.5439	.2959
	C_X	−.3774**	.7572	.2775
	A_Y	−.2003**	.7804	.0356
	R_X	.1682	.7908	.0163

** $P<.01$, * $P<.05$

このように、全体的にみると、全要因がコミットメントに影響しているが、男女ごとにみるとその様相は、非常に異なっている。まず男子についてみると、最も目につくのは、投資の寄与率（.6195）の大きさである。関係に対する関わりや愛着が、その関係に対してどれだけつぎ込んだかに強く関連していることがわかる。満足度に対する投資の寄与率が非常に小さく、投資したものが満足度を直接引き上げているとは必らずしもいえなかったのとは対照的である。次に報酬も BETA が有意（$F_o(4,42)=6.606$, $P<.01$）であり、寄与率も .0981 と投資要因に続いており、無視することはできない。しかし、コストと選択的価値の２つの要因については、BETA がいずれも有意ではなく（C_X $F_o(4,42)=2.550$, ns ; A_Y $F_o=(2.224$, ns)）。投資モデルの予想とは異なって

いる。男子の場合、関係から受けるコストや、他の相手に魅かれているかどうかなどは、当該の相手との関係を維持するかどうかの意図と結びついていないものと考えられる。

一方、女子の結果をみると、投資の寄与率（.2959）が最も高く、BETA も有意であった（$F_o(4,56)=20.038$, $P<.01$）。投資が最も寄与率が高いことについては、男子と同様である。しかし、女子の場合には、次のコストも、投資と同程度に寄与率は高く（.2775）、BETA も有意であった（$F_o=13.466$, $P<.01$）これは関係へのコミットメントが、投資した量だけでなく、失なうものの多さとも関連していることを示している。つまり、つぎ込んだらそれだけ関わりは強くなるが、一方損失が多い場合には、関わりたくないと思うことも多いのである。

選択的価値についても、BETA（−.2003）は有意（$F_o=4.753$, $<P.01$）であり、寄与率（.0356）は低いが無視できない。他に魅かれる相手がいる場合には、当該の相手に対するコミットメントの度合いは低くなるといえる。これについては、男子の場合に有意でなかったのと対照的である。

また報酬については、寄与率（.0163）も低く、BETA（.1682）も有意ではなかった。（$F_o=2.436$, ns）。いくら相手からの見返りがあったとしても、コミットメントの度合いには影響しないといえる。

考　察

Rusbult（1980, a）は、投資モデルの予測力の検討を、各変数を投入することによって、重相関係数の予測率がどれだけ向上するかという点から、Cramer（1972）のモデル比較法を用いて行なっている。本研究では、SPSS の重回帰分析による偏回帰係数（BETA）の有意性を予測の手がかりとした。従って、二つの研究の結果を直接比較することはできないが、両者の結果を見較べて考えていくことにする。まず、Rusbult（1980, a）と大きく異なった点は、選択的価値（A_V）が、コミットメントよりも満足度により強く関連していたことである。すなわち、モデルの予測では、満足度は $SAT_X=(R_X-C_X)-CL$ と

なる。比較水準（CL）は、実際には測定していないので、$SAT_X = R_X - C_X$となる。しかし、本研究の結果を、BETA の大きさの順に、各要因を模式的に描くと、

$$SAT_X = R_X - A_Y - C_X + I_X$$

となった。つまり当初の予想とは異なり、選択的価値や投資も満足度に影響しているといえる。これは、男女ともに見られた。ただし、当該の相手に対する満足度が低いから他の人物に魅かれるのか、あるいは、他の人物に魅かれるから満足度が下がるのかは特定できない。

一方コミットメントについては、選択的価値の BETA は有意であったが、寄与率は小さく、特に男子においては、BETA の有意性すら見られなかった。この選択的価値は、Thibaut & Kelley (1958) の用いた、選択の比較水準（CLalt）にあたる。彼らは、この選択の比較水準を、当該の関係の他に可能な、最も手近かな（available）関係から得られると期待される結果についての評価基準としている。この基準は、関係に対する満足度に結びつくよりも、当該の関係を持続するかどうかの判断の基準となるとされている。つまり、本研究におけるコミットメントに対して、より関連するはずのものであった。

この予想外の結果については、被験者となった大学生たちが、関係を二者択一的なものと取らえていないためではないかと考えられる。つまり、異性との関係が、多分に複数同時進行的になされ、結婚の相手を選ぶといった、特定の一人を選択しなければならないという選択性が薄いのではないかと思われる。さらに考えるならば、小此木（1979）のいう新しいモラトリアム心理のように、関係の持続性は曖昧なままに置かれ、こちらを捨てこちらを取るといったことは避ける傾向にあるのかもしれない。

結果からみると、特に男子にその傾向が強く見られ、他の相手に対する評価は、当該の関係へのコミットメントとは、有意な関連がみられなかった。

予想とは異なった第二の点は、コストの影響力である。特に男子と女子に差がみられた。男子は、満足度に対しても、コミットメントに対しても、BETA は有意でなく、相手から受ける損失からは影響されないといえる。一方女子

は、満足度・コミットメント両方に対して、コストの BETA は有意であり、特にコミットメントに対するコストの寄与率は、投資要因に並ぶほどに大きい。損失の大きい関係には関わりたくないという気持ちの表われととることができる。女子の異性との関係に対する、より防御的な姿勢を表わしているのではないだろうか。Rusbult (1980 a) においては、本研究の男子の結果と同様に、コスト要因のコミットメントの予測力の弱さが指摘されているが、こうしたコスト要因の予測力の弱さは、投資モデルの持つ弱点というよりは、関係の置かれた状況や関係を認知する人の特性によって、各要因の影響力が異なると考えた方が妥当であろう。

以上のように、モデル式からは少しはずれた結果がみられるものの、関係についての満足度とコミットメントを区別すべきであるとする、基本的な考え方については支持されているように思われる。すなわち、男女を合わせた全体の結果をみると、BETA の有意性については、満足度・コミットメント両者とも、すべての要因が有意であった。しかし、寄与率の点からは両者に差がみられ、.10以上の寄与率をとると、満足度は報酬と選択的価値、コミットメントは投資とコストとなり、明らかに要因の影響力には差がみられる。特にコミットメントについては、相手から報酬が得られるか否かよりも、自分がどれだけその関係に投資しているかに関わっていた。この投資の概念は2つの内容を含んでいる。本来の意味での投資（例えば、時間・お金を費やす、自己開示するなど）と、本来別のものであったものが、当該の関係と結びつき、関係を解消するとそれも失なってしまうという付随的投資である。

この投資に類似する概念としては、equity 理論でいう投入量 (Inputs) の考え方があげられる。Walster, Walster, & Berscheid (1978, p. 10-12) によると、投入量は、「報酬あるいはコストと名付けられる、参加者のその交換への寄与」と定義される。Adams (1965) に始まる equity の考え方は、投入量に対する結果 (Outcome) の比率が、知覚された他者の比率と異なる時、不公平感やそれに伴なう緊張感が生じ、人はその緊張感を避けようと動機付けられるとするのである。この投入量の考え方は、本研究における投資を含む、より

広い概念と考えられる。すなわち、マイナスの投入量（例えば、自分は相手にいつも負担をかけている）も考えられる。しかし広範な内容を含むだけに、曖昧さを含む概念になってしまっているのは再考の余地があると思われる。また、equity 理論においては、不公平感に動機付けられた時、人が関係に対する認知をどのように変化させるかについても明確ではない。少なくとも本研究からは、equity 理論の投入量に含まれる、報酬は満足度を、投資はコミットメントをと、関係認知の異なる側面を変化させるであろうといえるのである。

関係に対する満足度とコミットメントを分離すべきであるという考え方は、Kelley (1983) によっても提案されている。彼は、love と commitmen という言葉を用いているが、相互作用をポジティブに促進する条件の一つとして love を、相互作用を安定的なものにするものとして、commitment をあげている。彼の考え方にも見られるように、関係に対する認知を、他者に対する魅力や関係への満足度など単一の次元で取らえることは難しいといえる。その意味で、本研究で用いた投資モデルは、対人関係の研究に非常に有効なモデルであると考えられる。特に、Levinger (1974) のレベル3の個人的な関係を共有する段階から、このモデルの適用が有効であろうと思われる。すなわち、この段階から、人は表面的な接触から、相互の自己開示と投資を開始するようになるのである。ただし、本研究でいうコミットメントからは、短期的な関係の維持が予測できるが、時間と状況によって安定性がどのように変化するかまでは予測できない。

今後の課題としては、日本的な対人関係に見られるように、「他者の気持ちを思いやる」といった他者認知の要因を、モデルに追加することがあげられる。西欧の対人関係において、人は自己が主体となって行動するが、日本的な行動様式としては、他者主体ともいうべき、気持ちをくんで行動するということがしばしば起こる。Fishbein & Ajzen (1975) が、行動の予測式において用いたような規範要因を、対人関係の発達図式に導入できるのではないかと思われる。

また、対人関係の発達を時系列的に研究することも必要であろう。Berscheid

(1985) によると、偽似実験的手法の使用や、非実験的手法によるデータを因果的に分析する統計法の開発などで、自然状況における対人関係の研究が今後さらに発展するものと期待されている。本研究で用いた投資モデルについても、時間の経過と共に各要因がどのような影響力を持つのかを探ることも興味深いものと思われる。

最後になったが、本研究の調査にあたって、昭和59年度関西学院大学卒業生神田正伸氏（現、千代田生命）の協力を得た。ここに謝意を表したい。

文　　献

Adams, J. S., Inequity in social exchange. In Berkowitz, L. (ed.), *Advances in experimental social psychology.* Vol. 2. Acadmic Press, 1965, 266-300.

Ajzen, I., Effects of information on interpersonal attraction: Similarity versus affective value. Journal of Personality and Social Psychology, 1974, Vol. 24, 374-380.

Aronson, E., and Linder, D., Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology,* 1965, Vol. 1, 156-172.

Berscheid, E., Interpersonal attraction. In Lindzey, G., and Aronson, E. (ed.), *The Handbook of Social Psychology.* (3rd ed.). Vol. 2., Random House, 1985, 413-484.

Berscheid, E., and Walster, E., Physical attractiveness. In Berkowitz, L. (ed.), *Advances in experimental social psychology.* Vol. 7, Academic Press, 1974.

Berscheid, E., and Walster, E., *Interpersonal Attraction.* Addison-Wesley, 1969.

Cramer, E. M., Significance tests and tests of models in multiple regression. *American Statistician.* 1972, Vol. 26, 26-30.

Fishbein, M., & Ajzen, I., *Belief, Attitude, Intention and Behavior : An Introduction to Theory and Research.* Addison-Wesley, 1975

Huston, T. L., and Levinger, G., Intepersonal attraction and relationships. *Annual Review of Psychology,* 1978, Vol. 29, 115-156.

Levinger, G., A three-level view on attraction: Toward an understanding of pair relatedness. In Huston, T. L. (ed.), *Foundation of Interpersonal Attraction.* Academic Press, 1974.

三宅一郎・中野嘉郎・水野欽司・山本嘉一郎、SPSS 統計パッケージⅡ解析編、東洋経済新報社、1977.

小此木啓吾、モラトリアム人間の心理構造。中央公論社、1979.

Rusbult, C. E., Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1980(a), Vol. 16, 172-186.

Rusbult, C. E., Satisfaction and commitment in friendships. *Representative Research in Social Psychology*, 1980(b), Vol. 11, 96-105.

Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., and Rottman, L., Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1966, Vol. 4, 508-516.

Walster, E., Walster, W., and Berscheid, E., *Equity: Theory and research.* Ally and Bacon, 1978.

Zajonc, R. B., Attitudinal effects of mere exposure *Journal of Personality and Social Psychology, Monograph*, Vol. 9., 1968, 1-27.